

## 川端康成『千羽鶴』の倫理的価値再論

李 俄 憲\*

### The Ethical Values of Kawabata Yasunari's *Thousand Cranes*

LI Exian

*Thousand Cranes*, is a representative work of Kawabata Yasunari who won the Nobel Prize in Literature in 1952. The novel reflects Kawabata Yasunari's consistent literary and aesthetic thinking, yet so far it has garnered rather varied, and even totally opposite comments and value judgements in the academic field. Previous studies have basically examined the value of his works from the perspective of aestheticism, sense of sin, salvation of humanity, and erotic aesthetics. This article takes Kawabata Yasunari's Nobel lecture as the starting point, to reinterpret the text of the novel from the perspective of Nie Zhenzhao's ethical literary criticism theory and method of cognitive linguistics, the author tries to interpret the "mole" which appears repeatedly in the works by using the iconicity theory and metaphor theory of cognitive linguistics, so as to explore the author's intention in a more accurate and deeper way. Through the research, it is found that Kawabata Yasunari, with the help of the background and atmosphere of Japanese traditional beauty, shows his deeper ethical thinking and concern for humanity, endows his works with special themes and literary values from the ethical and moral level.

キーワード：認知言語学，倫理環境，倫理身分，倫理意識，倫理選択，倫理的価値

Key Words: cognitive linguistics, ethical environment, ethical identity, ethical awareness, ethical choice, ethical value

### 問題の提起

『千羽鶴』も『雪国』も、長く新聞や文学誌に連載された後に本になった作品である。今回取り上げる『千羽鶴』は「千羽鶴」(1949年)「森の夕陽」(1949年)「志野彩陶」(1950年)「母の口紅」(1950年)「二重星」(1951年)の5章に分かれている。小説の内

---

\* 中央大学政策文化総合研究所客員研究員

Visiting Research Fellow, The Institute of Policy and Cultural Studies, Chuo University

容は、主に会社員の三谷菊治とその父親の愛人、茶道の師匠の栗本ちか子という基本的な人物を手がかりに、菊治と父の恋人でもある太田夫人とその娘、文子の二世代、茶道の弟子稲村ゆき子との性愛と情愛関係を描き、菊治、栗本ちか子、太田夫人、太田文子、稲村ゆき子などの複雑な人物像を形作っている。戦後日本の特殊な社会文化を背景に、混乱した人間関係と運命の結末を示したこの小説については、発表から現在まで、日本文学研究の分野、特に川端研究界では諸説あり、正に侃侃諤諤であり、善悪両端の価値判断現象を呈しているといえる。

先行研究で川端康成を高く評価した三島由紀夫は、この小説は擬古典主義の代表作、すなわち耽美主義と審美文学の極端さを超えているとし、さらに川端は古典美の形を作るために、人と人との関係も単なる人間関係ではなく、より深く長期に沈める生身の人間関係であることを示唆していると主張する<sup>1)</sup>。山本健吉は太田夫人の破滅の美を通して、この作品の罪の意識と虚無主義表現を力説した<sup>2)</sup>。梅沢亜由美は先行研究に基づいて、菊治と文子の罪の意識の結果はある意味の救いであり、作品全体が菊治の自己浄化と漂泊の物語であると考えている<sup>3)</sup>。哲学者でもあり評論家でもある梅原猛は、川端作品全体の倫理意識と官能美意識の対立と矛盾を比較的深く検討しているが、最終的には仏教の魔界思想にまで踏み込んで、川端文学の仏教要素を強調している<sup>4)</sup>。さらに、『千羽鶴』の主人公菊治にとっても、女性には伝世の貴重な茶道と同じ意味を持つ存在であり、作者の川端康成は確かに女性賛美者ではなく、ただの女体嗜好者である<sup>5)</sup>との研究者もいる。日本の研究者は基本的に唯美主義、罪の意識、人間性の救済、官能審美などの観点から作品の価値を見つめ、作品の芸術性や思想的価値を部分的に否定している。

中国国内では、葉渭渠に代表される研究者は、基本的にこの作品の美学的探究に集中している。葉氏は川端康成が小説の中で世俗の道徳的規範を超えて、一種の幻想の中の美、超現実美の絶対境界を創作しようとしていると指摘している<sup>6)</sup>。孟慶枢は思想、文化、審美と宗教などの多方面から論証し、『千羽鶴』のテーマは日本の伝統美であり、人類の魂を浄化する唯一の道であるとみなしている<sup>7)</sup>。他の研究者は、日本の学者と同様の視点を持っていることが多く、作品の倫理的・道徳的要素やその価値は基本的に認めず、宗教的ともいべき川端自身の魔界思想から議論を展開している。李均洋氏が考えるように、『千羽鶴』は「東洋小説の美学の花」<sup>8)</sup>である。呉永恒は、川端が官能の欲望に満ちた魔界で真と美を探そうとしたと考える<sup>9)</sup>。さらに、川端は魔界に入ることによって、一切の道徳的抑制から逃れ、再生を図ろうとしたとする説<sup>10)</sup>もある。魏威だけは『千羽鶴』の倫理的要素と道徳の勝利を肯定したが、同時に、菊治は道徳が情欲に勝った後、逆に退廃的になり、かえって官能の美が道徳より重要であることを反証したのではないかと指摘した<sup>11)</sup>。いずれにせよ、日本の学界の評論の枠をほとんど突破していない。

しかし、ここで最も言及する必要があるのは、作者川端康成自身による作品への評価と認知である。ノーベル文学賞受賞時の演説「美しい日本の私」では、日本の美学理念、文学的追求、美の特質について、ほぼ全編にわたって丹念に論じながら、『千羽鶴』についてのみ、次のように述べている。

（前略）日本の茶道も「雪月花の時、最も友をおもふ。」のがその根本の心で、茶会はその「感会」、良い時に良い友だちが集ふよい会なのであります。ちなみに、私の小説「千羽鶴」は、日本の茶の心と形の美しさを書いたと読まれるのは誤りで、今の世間に俗悪となった茶にたいしてそれに疑ひと警めを向けた、むしろ否定の作品なのです<sup>12)</sup>。

ここで川端康成は、『千羽鶴』が日本の伝統美ではなく、戦後日本社会で低俗化した伝統文化に対する懐疑と否定であることを端的に指摘している。もちろん、我々が完全に川端本人の言葉を作品のテーマと価値の唯一の判断基準として、他の角度からの解説を否定してしまうことはできない。更に作品と日本の伝統美との関連をも否定できない。なぜかという、批判そのものも重要な関連にほかならないからである。しかし、否定できない事実は、川端本人による作品評価と認知は、この小説を解明する最も重要なポイントと切り口を提供していることである。同作品を精読すると、川端康成が作品の中で日本の伝統美の単純な称賛ではなく、より深い思考と疑問を持っており、当時日本社会の伝統的な文化認識に対する警戒であり、さらには否定的な立場に立っていることは明らかである。本研究の足がかりはまさにここにある。聶珍釗の文学倫理批評の観点から『千羽鶴』のテキストを読み返すと、作品中の人物が皆明確な倫理意識を持っており、同時に倫理的困惑や倫理的混乱に陥っており、そして最終的に倫理選択をせざるを得ないという過程は、作品全体のテキスト構造や具体的な詳細描写などを通じて裏付けられているように呈示されている。

文学の倫理学批評では、文学そのものはその起源から倫理の産物であり、文学の価値はその倫理の教えの機能にあるとされている。文学であれば、古代であれ、現代であれ、西洋であれ、東洋であれ、教誨はそれらの基本機能である<sup>13)</sup>。『千羽鶴』全体の創作の醸成と発表年代を概観すると、川端康成は日本の古典美あるいは伝統美の背景と雰囲気借りて、より深い倫理的思考と人間への関心を表現し、倫理的・道徳的な面や角度から作品に特殊な、あるいはより高いレベルのテーマや文学的価値を与えているといえる。

## 一 倫理環境と倫理構造

『千羽鶴』の創作と発表時期は、日本の敗戦直後の四十年代末から五十年代初頭であり、日本の戦後の経済と文化の回復期である。社会全体が混乱し、価値観が迷走し、人々の物質生活だけでなく、様々な社会思潮も氾濫していた。これによって戦前と戦時に培ってきた価値判断基準がバラバラになり、本来の国民の精神的支柱や信仰をも喪失していたのである。同時に、戦後の新旧勢力が交錯した現実には、人々は非常に迷い、不安、無力を感じていた。これらが『千羽鶴』という作品の壮大な時代倫理環境であり、特定の時代倫理背景である。この特定の倫理環境が設定されてこそ、当時の倫理現場に立ち返って、客観的な倫理を説くことができる。川端も作中でも絶えず空襲を受けた日本の戦争の思い出を強調している。その中で、太田夫人が菊治に文子が爆撃の危険を覚悟の上で三谷を家まで見送ったことを回想しながら話したり、空襲中に三谷の料理を買ってきたりしたこと<sup>14)</sup>など、読者に戦後の倫理環境であると思い起こさせて強調している。

このような大きな時代の倫理が背景にあったからこそ、作品の中の菊治を主人公とする人物関係および倫理環境の真実性と合理性が更に保証される。菊治は幼い頃からの倫理環境が複雑で混乱していた。両親は相容れず、母親は孤独に陥り何の幸せもなかった。更に茶道の師である父は栗本ちか子と太田未亡人との不倫関係を持ち、八、九歳の子供だった菊治は、父の愛人である栗本ちか子の胸にある掌ほど大きく、黒毛のあざを無防備に見てしまった。

菊治が八つか九つの頃だつたらうか。父につれられてちか子の家に行くと、ちか子は茶の間で胸をはだけて、あざの毛を小さい鋏で切つてゐた。あざは左の乳房に半分かかつて、水落の方にひろかつてゐた。掌ほどの大きさである。その黒紫のあざに毛が生えるらしく、ちか子はその毛を鋏でつまんでゐたのだつた。(中略)

ちか子の膝の新聞紙に、男のひげのやうな毛が落ちてゐるのも、菊治は見てしまつてゐた。

真昼なのに天井裏で鼠が騒いでゐた。縁近くに桃の花が咲いてゐた。(中略)

菊治は白つばくれてゐる父に義憤を感じた。菊治もちか子のあざを見たのに、その菊治を無視する父にも憎悪を感じた。(中略)

またしかし、菊治が十歳を越したころ、あの時の母の話はよく思ひ出されて、あざのある乳を呑んだ、腹ちがひの弟か妹が出来たらと、不安におびえたものであつた<sup>15)</sup>(強調は筆者による)。

これが作品の中の人物群の具体的な倫理環境である。第一章は二ページ足らずで、栗本ちか子と他の登場人物との関係を叙述する中で、乳房の上にある掌ほどのあざをひっくるめて「あざ」という言葉を使ったのは25回であった。前後を貫いているテキスト中に「あざ」が43回も登場するのは、世界文学の古典にしても特殊なケースと言わざるを得ない。認知言語学の象似性理論と比喩性理論を用いて作品中に繰り返し出現する「あざ」を解説することは、それに含まれている深い意味と価値をより深く理解することができ、著者の意図を探求するために新しい道を提供する。「類似性研究は、現在の言語研究における重要な側面の1つであり、言語の本質的な属性とその機能を全面的に明らかにするために重要な意味を持つ」<sup>16)</sup>。象似的研究は言語学分野だけに限られているわけではなく、研究の深まりと推進に伴い、学際的な象似的研究は今後の研究指向を示唆している。

本稿では、類似性理論における数量象似性の原則を用いて、『千羽鶴』に複数回出現する「あざ」という語を分析する。数量象似性は擬似像類似性（構文類似性）の重要な構成部分であり、「言語単位の数に表現された概念の量と複雑さとに比例して似ており、測定可能と逆比象に似ている」<sup>17)</sup>という。すなわち言語の形式が多いほど、内容が多いほど言語単位数が多くなり、意味が強くなる。王寅は主に辞書格、文体特徴と類似性の関係を重複；対称；省略；禁忌語；語彙密度、情報密度、曲言などにまとめた<sup>18)</sup>。このうち、繰り返しは同一言語成分を繰り返し用いることで何らかの芸術的効果を達成する修辞手法であり、言語成分の繰り返しは語符数の増加を意味し、擬似的原理により語符数が多いほど含まれる概念や意味が多い。『千羽鶴』では、最も典型的な重複は「あざ」という言葉で、栗本ちか子の乳房上の「あざ」が全部で43回も出てきて、第一章二ページ足らずのテキスト空間だけでも「あざ」という言葉が25回も出現し、その数の多さに驚く。

「あざ」という言葉はこのように頻繁に繰り返し出現し、語符の数を大きくし、あざの人々の頭の中での印象を強化するだけでなく、あざに含まれる概念や意味を強めている。あざは人体の客観的な存在だけではなく、あざの出現回数が多くなるにつれて、その表現の意味や喻義も増強しており、これが数量象似性の現れである。小説では、「あざ」はいつでも異なる時空に登場する。菊治が栗本ちか子の招待状を受け取ったとき、彼女の体のあざを思い出し、菊治が初めてちか子のあざを見たときのシーンとその後の両親との会話を思い出の形で再現し、その後、時空は再び現在に戻ってきた。菊治が太田夫人と肉体関係にあったとき、菊治はそのあざについて何度も言及した。「あざ」は、小さい頃から菊治を悩ませ、菊治をうんざりさせ、恐怖させた存在だったといえる。「あざ」について何度も言及して、繰り返して現れたのが、困っている菊治の心の表れであった。川端康成は、繰り返しの修辞手法を用いて数量象似性を複数の場面に織り交ぜ、菊治の心の苦痛の状態を巧みに再現している。



「あざ」の繰り返し出現は類似性の原則と密接な関係があるほか、認知言語学の比喩性理論の観点から、「あざ」と比喩性との内在関係を解析し、「あざ」の内包の深層把握を実現することができる。古代ギリシャのプラトンから、比喩性の研究は2千年以上の歴史を持っている。比喩性は言語現象だけでなく、人間の認知の手段や方式であり、比喩性も修辞分野から認知科学分野への飛躍を実現している。比喩性はイメージから離れないことが多く、イメージとの間には密接な関係がある。イメージは文学作品に欠かせない要素であり、文学の重要な範疇の一つである。文学理論ではイメージの定義は異なるが、すべてのイメージを「意」と「象」、すなわち感情と物象の有機的統一と見なし、比喩性は被喩詞と喩詞にも関連している。比喩性とイメージとの関係は、比喩性によって自身の意味の昇華を実現する必要があることである。単一または複数のイメージが比喩性を再構成しており、比喩性の実現にはイメージが離れていない『千羽鶴』では、「あざ」自体が一種のイメージであり、このイメージの繰り返しが比喩性を形成しており、以下は認知言語学の角度から「あざ」と比喩性との関係について述べる。

「あざ」はメラニン沈着作用が皮膚に作用することによる生理現象であり、人に黒い視覚的衝撃を与える。「黒」自体は一種の色彩である。色彩は人の視覚、神経系の作用下で外部世界に対する感知であり、客観的な事物に対する具体的な反映だけでなく、人の認知体験と密接な関係がある。レコーフは色域が時間域、空間域、感情域と同様に、言語中の最も基本的な認知域の一つであることを指摘した<sup>19)</sup>。色と比喩性がつながって色比喩性が形成されている。文学作品における色彩使用は、テキストの言語芸術を加える一方で、著者は自分の感情や思想などの主観的な感覚を色に取り入れ、比喩性によってテキストにより深い意味を与える。黒は最も一般的な色であり、人間が最初に認識した色の一つでもある。作品中の「あざ」は客観的な描写のように見えるが、実際には比喩性と色比喩性をイメージする二重比喩性があり、「あざ」は起源域とターゲット域を構築する架け橋となり、具体的には以下の2種類の比喩性を含む。

1. 感情隠喩。作品中の43回に及ぶ「あざ」という言葉は、読者に視覚的衝撃を与えるだけでなく、作中の人物や作者の感情表現でもある。趙彦春は「表現過程において、人々はよく視覚を用いて感情を隠喩する」<sup>20)</sup>と指摘している。日本の神道では、黒は禁忌色であり、死を象徴し、恐怖感を与える。同様に、『千羽鶴』の栗本ちか子の「あざ」も菊治に大きな恐怖を与え、八、九歳のころに見てから頭に残る悪夢のような存在となった。作品では、菊治が初めて「あざ」を見た様子が描かれている。「あざは左の乳房に半分かかつて、水落の方にひろかつてゐた。掌ほどの大きさである。その黒紫のあざに毛が生えるらしく、ちか子はその毛を鉄でつまんでゐたのだつた。」<sup>21)</sup>人体の生理現象として、あざには本来恐ろしいところはないが、栗本ちか子の「あざ」は二つの点において極めて

異常だった。一つは「あざ」の面積が極めて大きく、乳房の半分近くを占めているところで、掌ほどの大きさがある。もう一つは「あざ」に黒い毛が生えていることである。菊治が初めて「あざ」を見たのは栗本がはさみで黒毛を切った時だった。こんなに広い黒毛の「あざ」がどれだけ恐ろしい光景なのか、まして当時の菊治は八、九歳の子供だった。栗本ちか子のあざを目の当たりにした後、菊治はあざに恐怖を抱き、醜い象徴と見ていたが、菊治はそのあざだけでなく、あざの生えた乳を飲んだ子供を恐れていた。年をとるにつれて、菊治の頭の中でのあざの印象は薄くなっていないだけでなく、かえって印象は強く、ますます深くなり、菊治の脳裏に焼き印のように深く刻まれていた。もともとの「あざ」に対する恐怖感は次第に嫌悪感に変わりつつあり、作品では菊治は何度も「あざ」への嫌悪感をにじませている。代表的なのは「ちか子の乳房から水落へかけてのあざは蝦蟇のやうに具体的な記憶になつてゐる」<sup>22)</sup>、あざを蝦蟇にたとえて、嫌悪感が生まれていることを示している。「あざ」はもはや一種の具体的な客観的なものではなく、菊治の心の感情と感情の支えであり、感情の隠喩である。その感情は徐々に拡大し、「あざ」の持ち主である栗本ちか子本人に移り、菊治は栗本に対して嫌悪感を持ち、栗本が紹介し、自分も気に入っていた稲村ゆき子との結婚まで拒否してしまった。菊治が自分の一生の大事を放棄しても栗本と一線を画すのは、栗本への不満と憎悪を反映しており、その感情の明らかな発露であった。

2. 道徳的隠喩。王正春の考察によると、日本語の「黒」は失敗、恐怖、神秘、死、虚無、地位低下、荘重さを象徴するほか、悪、陰険、有罪を象徴している<sup>23)</sup>。黒は無彩色だが、それ自体の色は抑圧され、光から離れ、闇や悪を連想させやすい。日本語では、「黒」はある人が潔白ではなく、犯罪者の身という意味も表している。殷融は実験を通じて、「白黒概念と道徳概念の比喩性の連結には心理現実性が存在する」、「不道徳概念と黒は心理現実性の連結を持っている」<sup>24)</sup>ことを発見した。すなわち、黒は往々にして道徳的な対立面として存在し、不道徳を隠喩している。「川端康成は黒の固有の属性をつかんでいるが、川端文学では、黒は主に真の善美に反する現象を表現している」<sup>25)</sup>と王琚鵬が語ったように、菊治の心の中で、蝦蟇のようなあざは醜いだけでなく、「悪」の象徴でもある。例えば、「しかし、二人の女が現に生きて父を語つたのを思ひ、一方で母が死んでゐるのを思ふと、菊治はなにか憤りも湧いて来た。ちか子の胸の醜いあざが目には浮んだ。」「<sup>26)</sup>川端康成は菊治の口を借りて、「あざ」に対する態度を明確に表現した。菊治が栗本のあざを初めて見た後、作品にはこう書かれている。「真昼なのに天井裏で鼠が騒いでゐた。縁近くに桃の花が咲いてゐた。」<sup>27)</sup>この一見関連していないような一言に、実は作者は深い意味を秘めている。鼠の色は濃い灰色で、黒に似ていて、汚く、人に見えない。片や桃の花の色は鮮やかで、美しい感じを与えて、美しさを表現している。鼠と桃の

花は全く違う 2 種類のイメージで、一暗一明、一醜一美で、一緒に置いて鮮明な対比をしている。川端康成は、栗本ちか子自体のあざと、日本の伝統美を代表する茶室を鼠と桃の花に例え、さらにあざの醜さと汚れを裏打ちし、川端のあざに対する批判を表現している。先に述べたように、栗本のあざは醜いが、「悪」はどこから来たのだろうか。全文を読んで、菊治の父と栗本は師弟だったが、倫理道德に反して恋人関係に発展し、菊治の父は菊治の気持ちをかえりみず、幼い彼に醜いあざを見せたことが分かった。菊治は何度も父とあざとの関係を想像していたが、「父はちか子の胸のあざを、時折指でつまみでみたりすることはなかつただらうか。父はあのあざに噛みついたことだつてあるかもしれない。」<sup>28)</sup> 菊治の目には、「あざ」が父と栗本との不倫関係の象徴であった。菊治の頭に焼き印のように刻まれた「あざ」が、常に場面を問わず菊治の脳裏に浮かび、菊治と太田夫人が肉体関係にあったときに菊治は何度もその「あざ」に言及し、その後父とあざのことを考えると、自分と父の影が重なって、自分は父と同じように倫理・道德を越え、倫理的タブーを犯し、倫理犯罪をなしたような気がした。「あざ」はすでに道德と結びついており、倫理的混乱の隠喩となっている。

菊治が初めて「あざ」を見たときの八、九歳から三十歳近くまで、あざは二十年近く彼につきまとい、作品では菊治は「暗く醜い幕につつまれてゐる」<sup>29)</sup>と何度も言及していた。これは明らかにあざの外観の象徴性を通して、菊治が幼い頃から生きてきた倫理環境がどれほど醜悪、矛盾、奇形、異様、いかに混乱していたかを読者に強調したものである。最も伝統的な美を示す「雪月花の時の一番の思友」の茶室は、女性の恥ずかしさや矜持を全く顧みず、基本的な礼儀と教養を持つはずの栗本ちか子が着物の胸元を開いて、自分のあざの黒い毛をはさみで切る場所となってしまった。いわゆる茶道や伝統文化も、醜いあざに全面的に覆われて汚染されており、伝統美は失われてその救済（ないし浄化）をどこに求めようもない。

その後、作中の重要人物の登場シーン、特に茶室の集まり、菊治の父・三谷の追悼のあつまり、稲村ゆき子と菊治のお見合いなど、この胸に巨大な醜いあざを持つ栗本ちか子が全部企画し、そして参加した。いわゆる伝統的な茶道、伝統衣装、伝統行事などが全文 43 カ所のあざに包まれている。この点だけでも、川端康成がノーベル賞授与式で日本の戦後伝統美への皮肉と批判を的確に裏付けているのは、日本の戦後社会の悪趣味な茶道への懐疑と否定を端的に示していると考えられる。

そこで、このような大きな時代の倫理環境と具体的な作品人物群の倫理環境の中で明らかな倫理構造が形成された。「倫理構造とは、テキスト中の人物の思想や活動を手がかりに構築されたテキスト構造であり、倫理構造には、人物関係、思考活動（意識構造と表現構造を含む）、行為と規範の 4 つの基本構成がある。人物関係とは、主に異なる人物間の



関係構成を指す。」<sup>30)</sup>主人公の菊治の中では、死んだ父の三谷と栗本ちか子、そして太田夫人とその娘との関係が複雑な倫理構造になっている。この人物間の倫理構造は、実は上記のような大きな時代の倫理環境と具体的な人物間の倫理環境の具象化でもある。その役割は、菊治と太田夫人との出会いが、父の不倫に基づく二重の近親相姦につながり、菊治と太田夫人とその娘の倫理的ジレンマを生んだことにある。それによって『千羽鶴』の主題思想と人物形成の倫理の現場と最も基本的な芸術の枠組みを形成した。

## 二 倫理身分と倫理意識

では、『千羽鶴』の基本的な倫理構造の中の人物群の持つ倫理意識、倫理身分は、戦後混乱した現実においても、明らかにされているのではないだろうか。少なくとも倫理意識ははっきりしているのではないだろうか。これは文学作品を倫理的に解釈する鍵である。実は、作者の川端康成の倫理意識や作中の登場人物の倫理意識は、非常に鮮明に作品の中で余すところなく表現されていると考えられる。父の三谷と栗本ちか子と太田夫人の不倫関係の記述も、三谷夫人と夫の二人の愛人との倫理身分の記述も、互いの倫理的特質をはっきりと示している。菊治と太田夫人およびその娘の太田文子との二重乱倫関係の記述では、語り手の川端康成と登場人物の倫理意識ははっきりしており、さらには故意に誇張された倫理身分や倫理意識が浮き彫りになっている。これは、人物関係のコミュニケーションに用いられる言葉の特色に現れ、一方で、不倫や不倫に陥った人物の倫理自責や道徳的罪悪感に表現されている。

菊治が太田夫人に初めて会ったとき、太田夫人から自分への注目や温情に反感を持ち、特に太田夫人がわざと帰宅の道で自分を待っていることを知ったときには、あまり日本語の習慣に合わない表現を使っている。「それでお嬢さんは、お母様が私をお待ちになっていることを、御存知なんですか。」<sup>31)</sup>「私の父は、お嬢さんを随分苦しめたんでしょうから。」<sup>32)</sup>ここはほとんどわざと人物間の倫理的な身分を強調している。さらに、作中の菊治が太田夫人と不倫した後、夫人が菊治と稲村ゆき子が結婚したかどうかを問うと、菊治は答えなかった。

仲人をするという栗本だって、父の女ですよ。あいつは過去の毒気を吹きかける。  
あなたは父の最後の女だが、父も幸福だったと、僕は思いますよ<sup>33)</sup>。

など、人物間の倫理身分、親族関係、血縁関係をはっきりと表現している単語や語句の全文中の登場回数は351回と多く、日本語、特に敬語・謙譲語や授受動詞による表現の場

合、日常会話では、できるだけ私・あなた・彼のような主語を使わないようにしているが、作品中のこれらの表現文は、不必要な主語だけでなく、大量の敬語を使用している。この作品の主人公のはっきりした倫理意識が、敬語や倫理身分を示す主語を意図的に使わせているからであろう。作者の川端康成がこのような意図を持っているかどうかにかかわらず、読者としては、言語的特徴に応じてこの表現の内包を読み取ることができる。その他、「未亡人」、つまり中国語の「未亡者」など、結婚後に夫を失った未亡人であることを示す言葉も頻繁に使われている。そのため倫理綱常の種々の規制や倫理の限界がますます明らかになり、言動などは社会倫理や家庭倫理に拘束されることになる。つまり、テキスト中の倫理身分、倫理的限界や倫理的禁忌を表すフレーズや合文は枚挙にいとまがなく、作者自身や作中の人物の倫理意識がいかに明確であるかを十分に表現している。

一方、登場人物の中には、菊治から太田夫人、太田文子に至るまで、不倫と近親相姦後の自責と懺悔に満ちた明確な罪悪意識が表現されていて、三人の近親相姦前後の会話の記述や、それぞれの心理活動の描写に散見される。先に述べたような先行研究ではすでに多くの議論がなされているので、ここでは割愛する。簡単に言えば、作品の主人公などの大量の自責、懺悔、罪悪意識そのものが、倫理意識がはっきりし、さらには故意に大げさに強調された倫理意識の最良の証明である。

日本の哲学者・文学評論家の梅原猛（1925-2019）は、日本精神史、古代史、文学、宗教などの分野で独創的な考えを持っており、仏教を中心とした日本人の精神性に関する独自の研究は「梅原日本学」と呼ばれる。梅原は川端康成とは生前に何度か交流を持ち、「川端文学」と呼ばれる作品はその生涯の歩みに影響を与えた。梅原は川端康成という人物の理解に基づいて、川端の作品をこう評価する。

私が少年時代に愛読した作品は、『雪国』までであるが、『伊豆の踊り子』にせよ、『雪国』にせよ、戦前のものは健康なのである。あまり指摘する人は少ないが、川端さんは大へん倫理観の強い人間であったと思う。この倫理観は、天性の無私の精神とともに、公人としての川端さんを多くの人に信頼させた原因となったのであろうが、彼の戦前の作品には、倫理的意識が、それ自身放埒な官能的美意識を適度に抑制しているのである<sup>34)</sup>。

ここで、梅原猛は主として戦前戦後の川端作品における官能描写の比重の違いを論じているが、川端の倫理観の重さや倫理意識の明晰さに対する評価は鮮明かつ正確だ。川端康成の倫理思想と倫理意識の濃厚さを日本の学界で最も明確かつ肯定的に指摘している論断でもあり、『千羽鶴』を文学倫理学の角度と視野から読み解く重要な根拠と可能性でもあ

る。

### 三 人物群の倫理的混乱

言うまでもなく、『千羽鶴』の主要人物は非常にはっきりした倫理意識を持っているが、人間が明確な倫理意識を持っていれば、倫理的なあやまちや倫理的混乱は起こらないのだろうか。明らかに、明確な倫理意識を持っても、倫理身分の変化や倫理構造の変化が倫理的混乱を招き、衝突を引き起こすかどうかはさだかではない。聶珍釗は、「秩序が破壊された道徳観念が衝突する」「偶然」誤解なども、同様に倫理混乱であり、文学作品において、倫理的混乱の価値は文学性の増加と道徳的警告の提供にある<sup>35)</sup>と主張している。『千羽鶴』で描かれている内容のほとんどは、主要登場人物の倫理的混乱である。栗本ちか子が主宰する茶会の参加者の所属と、主人公の菊治との関係を詳細に描いた作品のように、純潔な「千羽鶴」を着たお嬢さん稲村ゆき子と太田文子、さらに太田夫人、栗本ちか子、そしてそれらをつないだ茶道具「黒織部焼」の茶碗を描いた第一章では、倫理的混乱の詳細が描かれている。この茶碗は、人物間の混乱関係を明らかにしており、極度の倫理的混乱を象徴していることが示唆されている。

令嬢が前に置いた茶碗は、菊治も見おぼえがあつた。父が使つてゐたにちがひないが、父が太田未亡人から譲り受けた茶碗である。

亡夫の遺愛品が菊治の父からちか子の手へ渡り、この席にかうして出てゐることを、太田夫人はどんな気持ちで見てゐるのだろうか。（中略）

太田から太田未亡人へ、未亡人から菊治の父へ、父からちか子へ、さうして太田と菊治の父との男二人は死に、女二人はここにゐる。これだけでも奇怪な運命の茶碗だった。

その古い茶碗をここでまた、太田の未亡人や令嬢も、ちか子も、稲村の令嬢も、他の令嬢たちも、唇にあてたり、手で撫でさすつたりしたのだつた。

「そのお茶碗で、私も一服いただきたいわ。さつきは別のお茶碗でしたから。」

と、太田夫人が少し出しぬけに言つた。

菊治もまた驚いた。おめでたいのか、恥知らずなのか。

じつと下向いてゐる太田の令嬢が、菊治は気の毒で見てゐられなかつた<sup>36)</sup>。

ここで、作者は読者に倫理がどこまで混乱しているのかをわざわざ警告している。日本の伝統文化を代表する黒織部の茶碗は、千利休の桃山時代から現代までの伝承作である

が、現代人の倫理秩序の破壊による、作品の人物群の倫理的混乱を、茶碗が本来の所有者である太田の死後、妻の太田夫人の手にわたり、さらに太田夫人が愛人の三谷に贈ったことをイメージして描かれている。三谷はその茶碗を、もう一人の弟子である愛人の栗本ちか子に渡し、胸に掌ほどの大きなあざを持った栗本ちか子がそれを盛大な茶会に使った。そこで太田夫妻とその娘、三谷親子、栗本ちか子、稲村ゆき子と他に来場したレディーたちは、それぞれの唇でキスをしながら、それぞれの手で運命のような茶碗を撫でていた。道徳、倫理、秩序、恩愛、羞恥、愛情などが、この茶碗の中で汚れていた。

その他の倫理的混乱の頂点を極めた描写は、作品には「偶然」の誤解や恍惚、時空の錯乱など、日本の古くからの「物の紛れ」<sup>37)</sup>の美学理念のように、人間の天性に由来する倫理的混乱が展示されている。

菊治はどうして夫人とかういふことになつたのかも、はつきりとは分らない、それほど自然であつた。夫人の今の言葉では、自分が菊治を誘惑したと後悔したのかもしれないが、おそらく夫人は誘惑するつもりはなかつたらうし、菊治も誘惑されたおぼえはなかつた。また菊治は気持ちの上でも、なにも抵抗しなかつたし、夫人もなにも抵抗しなかつた。道徳の影などはささなかつたと言へるだらう<sup>38)</sup>。

不倫関係にあった菊治と、父親の愛人である太田夫人は二人とも、恍惚と時空錯乱のような状態にあった。二人とも明確な倫理意識を持っていたが、相手への恋心や父への感覚探し、母性愛への憧れ、太田夫人の女性的魅力などが、偶然や誤解などの要因によって、作用していた。恍惚の間に上記の男女二世代の 20 歳段違いの倫理的混乱が現れた。

それだけでなく、川端康成が主人公の倫理的困惑や倫理的混乱を意識したレイアウトを設定していることが、作品全体の構造から明らかになっている。通常は第一章「千羽鶴」の各節の構成のように、菊治と父の愛人や愛人の娘たちとの面会と交流を正面から描いているはずである。しかし第二章「森の夕日」では、栗本ちか子が稲村ゆき子と会うシーンを紹介していたが、具体的な対面の内容は述べて第二節に入った。第二節では稲村ゆき子との交流や心の動き、思い出などを述べている。通常では心の動きや思い出などを叙述する時は途切れることができるし、勿論突発的な出来事を随時増加してもよい。そこで菊治と稲村ゆき子の深い交流、稲村ゆき子との結婚話、菊治の仲人をする栗本ちか子の心の苦悩等が述べられているノートに、不倫と乱倫の愛情に苦しめられて生きていけず、病気で弱った体を苦しめながら、娘の文子の助言と阻止を避け、菊治に自分の心情と想いを打ち明けに来た太田夫人が現れた。

そこで、菊治とその父の愛人である栗本ちか子、父の愛人であり自分の恋人でもある太

田夫人、そして自分の結婚相手の稲村ゆき子と同じ茶室という空間の中で順次会い、それぞれに気まずい思いをするという、倫理の戸惑いと倫理の混乱を強く絶妙に示している。これらの場面設定と叙述とは恰も登場人物たちが最後に倫理選択をしなければならないテキストの基礎でもある。

#### 四 倫理的ジレンマの悲劇的な倫理的選択

登場人物の倫理的困惑と倫理的ジレンマが、作品の中に十分に表現されているのは、倫理選択の際に必然的に遭遇する問題であり、この作品の倫理的価値でもある。人物が抜け出すことのできない倫理的ジレンマに陥ってこそ、真の悲劇的な倫理的選択が生まれるからである。菊治は、太田夫人が自殺したあと、稲村ゆき子との結婚をあきらめたかのように、文子と広い意味での乱倫関係になり、主観的に文子と生きていくことになったが、文子が出ていったことで、また戸惑う。文子はたまりかねた倫理に戸惑い、母の使っていた茶碗を壊し、菊治と手をたずさえて人生を送ろうとするが、再び母の恋人と関係を持つという現実と直面することができず、結局何も言わず家を出てしまう。太田夫人の最後の倫理的選択は最も複雑で、典型的であり悲劇的でさえある。

この点について、作中では人物の菊治自身を通じて太田夫人の自殺の原因について問題が提起されている。

夫人は罪に追いつめられ、のがれるすべがなく死んだのであろうか。愛に追いつめられ、おさえるすべがなく死んだのであろうか。夫人を死なせたのは愛か罪か、菊治は一週間考へ迷つてゐた<sup>39)</sup>。

ここは実は倫理の困惑とジレンマの中の死亡選択である。愛がなければ不倫の罪悪感はなく、その罪感も根本的な死の原因ではなく、罪感であれば、太田夫人は夫の白骨が冷えないうちに菊治の父三谷と密情し、その後菊治に会ったときには昔の恋人に会ったかのように、感情が混乱して乱倫の情が生じ、死ぬまで極度の罪悪感がなく、かえって何かの未練と躊躇があったのである。もちろん太田夫人も広い意味での近親相姦を抑えることができずに死んだわけではないが、実はこれもある意味の誤解である。なぜなら、太田夫人は自分の愛情を過度に抑える必要はないからである。父の三谷の時はなく、息子の菊治の時もなく、むしろこの過去の思い出と現実の恋が融合した愛の世界をもっと楽しんでいた。例えば、菊治が太田夫人与肉体関係になってからしばらく二人の会話があって、太田夫人は菊治の父と自分の恋、そして三谷から娘の文子への父のような愛について語り、それに



対して菊治は妙な憎悪と警戒を感じていた。

しかし、夫人をはつきり憎悪したり警戒したりするほどの気持は起きなかつた。なにか温かく油断させるものが、夫人にはあつた。

令嬢が必死になつたのも、母親を見るに見るかねてのことかもしれなかつた。

夫人は令嬢の話をして、實は自分の愛情を語つてゐるやうに、菊治には受け取れた。

夫人はなにか胸いつぱい訴へたいのだらうが、その相手として、極端に言へば、菊治の父と菊治のけちめがよくつかないかのやうであつた。ひどくなつかしげで、父に話してゐるつもりで菊治に話してゐるかのやうであつた<sup>40)</sup>。

つまり、単純な不倫や複雑な不倫は、太田夫人に罪悪感を抱かせるかもしれないが、それによって自分の情愛を抑え、自殺することはない。このやりとりは、父・三谷との不倫を懐かしんでいた菊治のもとに、娘の文子まで及んでいる。ここに、罪悪感もなければ、自分の不倫や広い意味での近親相姦を抑制することもない。

したがって、太田夫人の自殺は、倫理的困惑と倫理的ジレンマの中の死の選択である。夫人の自殺の根本的な原因は何なのか、私たちが気づくべきである。罪悪感も、抑えきれない不倫愛も、根本的な原因ではないと上文で述べた。夫の太田が死んだときには自殺しなかったし、愛人の三谷が死んだときには自殺しなかったし、菊治と関係を持ったときには自殺しなかったし、また、娘に不倫を咎められたときには自殺しなかった。だが、自分が菊治の結婚の幸せの障害になったとき、彼女は迷わず自殺した。

簡単に言えば、多重的な倫理的混乱と倫理的困惑は太田夫人の倫理選択の困難と不可能をもたらし、最後には死で終わるという生より死の方が倫理的ジレンマの極端な状態である。これが太田夫人の死因でもある。作中では太田夫人の自殺後、菊治と栗本ちか子のやりとりがあり、ある意味で太田夫人の本当の死因が強調されている。

「菊治さん、稲村のお嬢さんのことを、太田の奥さんにおつしゃつたでせう。」

菊治は思ひあたつたが、しらをきつた。

「僕の話がきまつたつて、太田さんに電話をかけたのは、あんたぢゃないか。」

「はい、しらせました。邪魔しないでくれつて、言つてやりましたわ。太田さんの死んだのは、その晩でした。」

沈黙があつた<sup>41)</sup>。

前述のように、太田夫人は、栗本ちか子から菊治とゆき子の婚約会に参加することを通知された後、自分の乱倫・不倫が菊治とゆき子という若者の人生の幸せに影響を与え、幸福を追求する障害となったことを強く意識し、恥を顧みず、娘の制止をよそに、雨の中で菊治を直接見つけ、再び確認した後、その夜自殺したのである。三谷親子の愛を捨てることはできないから、それは彼女の名誉と命よりも重要だが、自分の存在と愛が愛人の菊治の幸せな結婚に影響を与えると認識したとき、彼女は自分の名誉と生命を放棄した。それは不倫や乱倫の後に行われた太田夫人の倫理的な高い境界の選択であったとも言える。もちろんその義は必ずしも太田夫人の主観的な追求ではなく、彼女にとってその義は彼女の愛そのものだったのかもしれない。

シェークスピア『ハムレット』のハムレットの延引と死因を論じていた聶珍釗の論断のように、「彼は母親の夫、自分の義父を殺さずに犯罪を犯さないことができるだろうか。ハムレットの答えが必要な一連の複雑な倫理的問題であるが、答えられず、倫理的ジレンマの苦しみに陥り、最終的に自分の悲劇を招いていくしかなかった」<sup>42)</sup>。義父を殺さず、父の仇を討つ家庭の倫理義務を果たすことなく、義父を殺し、王と母の夫を殺す国政の倫理に触れるのは禁物で、最後は何度も延引した後に、命を捨てて、自分の人生と時代の悲劇を完成させるしかない。太田夫人は同じように自殺をすれば一生の愛を捨て切れず、自殺しないと愛する人の幸せを壊すという極端な倫理的ジレンマに陥り、最終的には自分の悲劇的な倫理選択を成し遂げた。

倫理的选择の結果は互いに対立する2つの選択肢から導かれ、倫理的ジレンマと倫理的パラドックスが生じる。倫理的ジレンマは決して解決できないものであり、倫理的パラドックスは絶対的なものではなく、結果がどうであれ解決される。解決の結果がどうであれ、読者に有益な思考と道徳的啓示をあたえることができる。太田夫人の自殺選択の意義はまさにそこにある。

## 問題の結論

作品全文は「千羽鶴」「森の夕日」「志野彩陶」「母の口紅」「二重星」の五章に分かれており、一部の学者の観点のように官能美と肉欲美を表現するのであれば、「森の夕日」と「母の口紅」を小説のタイトルにすることができる。作品のテーマがいわゆる日本の伝統美を表現するのであれば、完全に「志野彩陶」と「二重星」を小説タイトルにすることができるが、著者は「千羽鶴」を総タイトルに選んだ。

千羽鶴の製作と贈与は、平和への願いや幸福への憧れを象徴する日本文化の伝統であることはよく知られているが、川端康成がこの作品を『千羽鶴』と命名したのは、日本文化

を主張するためであり、一方では、倫理的混乱や倫理的混乱から生じた倫理選択まで、作品の中の人物が倫理意識や倫理選択の重要性を戒めているのではないだろうか。誤った倫理選択は人類に人生の悲劇的な運命をもたらす：早死、自殺、醜悪、自責、自己追放と罪悪意識の無端の苦痛などの事実は、著者の人類への戒め、望みと祝福を表明した。著者は不倫や乱倫などの反倫理的・反道徳的行為で人間を捨てることはなく、むしろ人間を戒め、警告した上で平和の幸福を象徴する千羽鶴で人類を祝福している。

明確な倫理意識があれば、人々は正しい倫理選択をするのではなく、はっきりとした倫理意識を持つとともに、人間の生まれながらの獣性因子<sup>43)</sup>や情欲追求の役割を錯覚し、倫理的混乱と倫理的ジレンマに陥り、作中の人物菊治、太田夫人、太田文子のように悲劇的な運命の結末を生むことが多い。ある意味、人類社会生活の中でこのような人物のモードは更に倫理的な警告と教示の作用がある。

倫理的価値は、肯定的な道徳的価値と否定的な道徳的価値の総称である。「倫理的価値は、すべての道徳的価値が内外に含まれるほか、文学作品の悪役や悪役といった非道徳的価値も含まれる。これらの人物の品質と行為に対して道徳或いは不道徳が欠けているが、しかし彼らは依然として重要な倫理価値を持っており、これは反対側から教えを提供することである。」<sup>44)</sup>作中の栗本ちか子や菊治の父・三谷のように、栗本ちか子や彼女の胸のあたりにある掌ほどの毛の生えたあざは、まさに作中の悪の現実や道徳的敗壞の象徴的な存在である。

日本人学者の久松潜一は「人間として生活してゆく上の秩序が倫理であり、道徳である。従って人間生活を離れて倫理は存在しないし、人間形成こそ倫理の基本な課題となるのである。人間形成に文学の大きな課題があるといふことは文学が倫理と深い関係を有して居ることを示して居る。文学と倫理といふ問題は文学の本質的な問題となるのである。」<sup>45)</sup>と指摘した。『千羽鶴』における倫理記述は、文学という本質的な問題に直面し、東洋文化と東洋文明の特色を浮き彫りにし、日本の伝統的価値と現代的意義を再評価し、伝統と現代の複雑な関係を調和させ、対立から融合させ、川端文学の普遍性、民族性、世界的意義を実現したものである。彼は同時にこの作品を通じて現代社会の低俗化した茶道に対して懐疑と警戒を露わにし、否定し、伝統の東方文化を発揚し、それによって倫理と道徳のレベルで警戒と忠告を出し、更に文学の教育と教誨の役割を発揮し、その文学の思想と芸術の最高の価値を実現した。

#### 注

- 1) 三島由紀夫 (1964) 「解説」『日本の文学 38 川端康成』中央公論社。
- 2) 山本健吉 (1989) 「解説」『千羽鶴』新潮文庫。

- 3) 梅沢亜由美（1998）『『千羽鶴』から『波千鳥』へ—川端康成がめざしたもの—』『日本文学誌要』7, 51-60 頁.
- 4) 梅原猛（1983）『美と倫理の矛盾』梅原猛編『梅原猛著作集 19』集英社, 29-98 頁.
- 5) 川嶋至（1969）『美への耽溺—『千羽鶴』から『眠れる美女』まで—』『川端康成の世界』講談社, 172-183 頁.
- 6) 葉渭渠（2005）『東西を結んだ川端康成』（《结合东西方的川端康成》）『上海教育』第22期, 78-79 頁.
- 7) 孟慶枢（1999）『千羽鶴のモチーフと日本の伝統美』（《千只鹤的主题与日本传统美》）『外国問題研究』第3期, 44-51 頁.
- 8) 李均洋（2008）『私は仏なり—『千羽鶴』茶心・禅心美学論』（《我就是佛—『千羽鶴』茶心・禅心美学論》）『外国文学評論』第1期, 72-78 頁.
- 9) 吴永恒（1993）『「魔界」で真と美を表現する—『千羽鶴』が初登場』（《在‘魔界’中表现真与美—『千羽鶴』初探》）『外国文学研究』第2期, 78-82 頁.
- 10) 李偉萍（2010）『『千羽鶴』：魂を清める物語』（《『千只鹤』：“净化灵魂的故事”》）『世界文学評論』第2期, 191-194 頁.
- 11) 魏威（1987）『『千羽鶴』を読む』（《读『千羽鶴』》）『外国文学研究』第1期, 139-140 頁.
- 12) 川端康成（1999）『美しい日本の私』『川端康成全集』第28巻, 新潮社, 345-358 頁.
- 13) 聶珍釗（2014）『文学倫理学批評導論』北京大学出版社, 7 頁.
- 14) 川端康成（1955）『千羽鶴』『現代日本文学全集 37 川端康成集』筑摩書房, 254-255 頁.
- 15) 川端康成（1955）『千羽鶴』『現代日本文学全集 37 川端康成集』筑摩書房, 248-249 頁.
- 16) 盧衛中（2011）『言語象似的研究総説』（《语言象似性研究综述》）『外国語教育と研究』第6期, 840-849, 959 頁.
- 17) 王寅（2001）『意味理論と言語教育』（《语义理论与语言教学》）上海外国語教育出版社.
- 18) 王寅（2000）『象似性：文体特徴を取得する重要な手段』（《象似性：取得文体特征的重要手段》）『四川外国語学院学報』第4期, 39-43 頁.
- 19) 柯慶梅（2012）『認知言語学下色比喩性』（《认知语言学下颜色隐喻》）『海外英語』第22期, 242-244 頁.
- 20) 趙彦春（2014）『認知言語学：批判と応用』（《认知语言学：批判与应用》）南開大学出版社.
- 21) 川端康成（1955）『千羽鶴』『現代日本文学全集 37 川端康成集』筑摩書房, 248 頁.
- 22) 川端康成（1955）『千羽鶴』『現代日本文学全集 37 川端康成集』筑摩書房, 248 頁.
- 23) 王正春（2015）『日本語色詞の象徴的意味と文化』（《日语颜色词的象征意义和文化》）中国海洋大学修士論文.
- 24) 殷融, 葉浩生（2014）『道德概念の白黒隠喩表現及び道德認知への影響』（《道德概念的白黒隠喩表征及其对道德认知的影响》）『心理学報』第9期, 1331-1346 頁.
- 25) 王珺鵬（2014）『川端康成作品における「色彩」研究』（《川端康成作品中的“色彩”研究》）山東大学博士論文.
- 26) 川端康成（1955）『千羽鶴』『現代日本文学全集 37 川端康成集』筑摩書房, 254 頁.
- 27) 川端康成（1955）『千羽鶴』『現代日本文学全集 37 川端康成集』筑摩書房, 248 頁.
- 28) 川端康成（1955）『千羽鶴』『現代日本文学全集 37 川端康成集』筑摩書房, 249 頁.
- 29) 川端康成（1955）『千羽鶴』『現代日本文学全集 37 川端康成集』筑摩書房, 264 頁.
- 30) 聶珍釗（2014）『文学倫理学批評導論』北京大学出版社, 260 頁.
- 31) 川端康成（1955）『千羽鶴』『現代日本文学全集 37 川端康成集』筑摩書房, 254 頁.
- 32) 川端康成（1955）『千羽鶴』『現代日本文学全集 37 川端康成集』筑摩書房, 254 頁.

- 33) 川端康成 (1955) 「千羽鶴」『現代日本文学全集 37 川端康成集』筑摩書房, 267 頁.
- 34) 梅原猛 (1983) 『美と倫理の矛盾』梅原猛編『梅原猛著作集 19』集英社, 32 頁.
- 35) 聶珍釗 (2014) 『文学倫理学批評導論』北京大学出版社, 258 頁.
- 36) 川端康成 (1955) 「千羽鶴」『現代日本文学全集 37 川端康成集』筑摩書房, 252-253 頁.
- 37) 王向遠 (2014) 「日本の「物の流れ」論: 「源学」用語から美学理念へ」(《日本「物紛」論: 从“源学”用语到美学理念》)『上海师范大学学报·哲学社会科学版』第 5 期, 86-91 頁.
- 38) 川端康成 (1955) 「千羽鶴」『現代日本文学全集 37 川端康成集』筑摩書房, 257 頁.
- 39) 川端康成 (1955) 「千羽鶴」『現代日本文学全集 37 川端康成集』筑摩書房, 269 頁.
- 40) 川端康成 (1955) 「千羽鶴」『現代日本文学全集 37 川端康成集』筑摩書房, 255 頁.
- 41) 川端康成 (1955) 「千羽鶴」『現代日本文学全集 37 川端康成集』筑摩書房, 278 頁.
- 42) 聶珍釗 (2014) 『文学倫理学批評導論』北京大学出版社, 133 頁.
- 43) 聶珍釗 (2014) 『文学倫理学批評導論』北京大学出版社, 36-42 頁.
- 44) 聶珍釗 (2014) 『文学倫理学批評導論』北京大学出版社, 258 頁.
- 45) 久松潜一 (1954) 『国文学』東京大学出版会, 238 頁.